

福岡

地域福祉活動職員の

ま な こ

社協活動前進のために

No.41 1997年2月発行 福岡県地域福祉活動職員連絡会 まなこ編集委員会 印刷 コロニー印刷



全国社協職員のつどいレポート

若さは夢現の可能性

甘木市社協 前田 正剛

どういう訳か、なぜ私なのかよく解らないまま県社協の近ちゃん（地域課の近藤君）より電話で連絡があり、二年ぶりに復帰した「福岡県地域福祉活動職員連絡会」（昨年十二月に「福岡県専門員連絡会」から改組したばかりである...）の鉄砲玉として私と築城町社協の「真さん」こと佐々木君そして筑

後ブロック職員連絡会の若頭である長野君と、関西社協コミュニケーションワーカークomitee（関西コミ）が率いる「第四回全国社協職員のつどい」の状況偵察に、福岡県地職連カラ出張した。

このつどいに参加することを市社協事務局内でも了承を得ていたが、年末・年始の忘年会、新年会で忙しい中、前泊の宿泊場所探しや新幹線の乗車時間と予約、そして九州の片田舎からせっかく関西の中心地である大阪に行くので、「食い道楽」と「おいしい情報（地域福祉関係）」を調べ、調整する事が面倒くさい私は、どうしようかなと思案していた...

ところが、築城町社協の真さんは、この福岡県地職連カラ出張の依頼があつてすぐに、遠路大阪に行く機会を得たので「全国社協職員のつどい」の開催時間の前に、全国でも先進的な活動を実践している「大阪ボランティア協会」と「おおさか行動する障害者応援センター」を覗いてみよう、研修調整してくれ資料を山のように送って来るし、「大阪ボラ協」に地の利の良く、安価の宿泊先を出して来た。

更に新幹線と在来線との時間調整も含めた乗車計画・経費まで計算してくれるし、いたれりつくせりの「役員なみ...」の福岡県地職連カラ出張の始まりとなった（真さんは、旅行大好きらしく、旅行計画や行動日程作りが楽しいらしい。県内の市町村社協のスタッフは個性や特徴がいろいろ...その人の持つ個性や特技を、もつと仕事に生かせることが重要だと感じる）。

真さんの調整により小倉駅で合流した私たち三人は、ビールとバーボンを片手に本拠地「関西コミ」に何を上納するか、そして「全国社協職員のつどい」前の「おいしい情報」収集をどのようにするか協議をしながら一路大阪めざした。

夜の街「おおさか」めぐり

大阪の前泊ホテルに入り、「食い道楽」はどこや...?大阪名物食い物は...?、机上での情報収集と違い、土地鑑の無い私たちは、ホテル近くの商店街を何度も行き来しながら、今宵の餌とアルコールを求めてフラフラとさまよった。

さすが若手のホープ長野君は県南ブロックの使命を受けているので、精力的に夜の街「おおさか」の地域情報を収集すべく、サンドイッチマンのおじさんや、その筋のおネエさんやおニイさんから、何か意味ありげの割引券やチラシを復命書の添付資料として使用するであろう、多数収集するのであった。

大阪ボラ協・障害者応援センター

「大阪ボランティア協会」と「おさか障害者応援センター」の活動実践報告や、組織の詳細レポートについては、この「まなこ」の紙面に「真さん」が書くとして、私が「応援センター」を知ったのは、社協に入ってから間もない十四～五年位前だった。まだまだ県内で重度障害者の自立生活が少ない中で、障害者自立運動を目指していた、現在「きづなの家」事務局の立石昭彦さんと、二十四時間、三百六十五日の介護保障の実現が厳しい状況だった当時、個人のレベルでなく、組織的にしかも専従職員体制で行っている「応援センター」の活動を聞いて、大阪の凄さに驚きを感じ、介護手配の方法・人的調整についていつかは、訪問し自分の目と耳で確かめてみたいと思っていた。

低所得高齢者福祉中心に組み立てられたホームヘルパーの訪問派遣対象が規制緩和され：？、いや、在宅福祉サービスが必要な住民に、安心して地域で普通の暮らしが実現できるように在宅福祉サービスの充実が図られ、さらに受益者負担（サービスの一部有料化を含む）によるホームヘルパー等の在宅福祉サービスの充実化により、派遣に対し難色をしめしていた障害者や寝たきり・痴呆性高齢者等へのサービス供給も加速度的に対応できるようになってきた。

今回訪問の機会を得た私は「応援センター」が持つ介護者派遣事業の位置

づけが気になっていた。

案の定、時も流れ基本的に無料（活動費は無料、交通費の実費保障は利用者負担でなく応援センターの会費より支出）の「応援センター」の介護者と公的サービスであるホームヘルパー事業との整合性の問題。

そして、「応援センター」が派遣する介護者の中でも、利用会員が特に気合う介護者の専有化の問題。

一部有料の公的ホームヘルパーとの活動領域の線引きを含めた公的保障の問題等々、本来の「応援センター」の持つ障害者解放運動の理念の部分と実状とのギャップなど。

様々な問題を抱え、専従スタッフの中村さんの苦悩と、課題は図り知れないものであった。

さらに追い打ちをかけるが如く、阪神大震災による介護問題との支援組織の在り方が、今後の「応援センター」が本質をどう展開するか大きな転換期を迎えている様であった。

解説1：大阪市の公的ホームヘルパー制度は公共団体および外郭団体（社協を含む）に専従スタッフを一部配置し、サービス供給量の不足分は金銭給付を行い、当事者自己調整制度を行っているらしい。

お客さんには損はさせません

一方「大阪ボラ協」の実践は、社協の法人化の歴史と変わらず約三十年前に設立され、活動に裏付けられた成果

は、私たち後進社協の入り込む余地は無かった。

ボランティア育成講座は無料の発想の、田舎社協マンからすると、受講者が受講料を負担し活動協力するというスタイルを完成しているのにはビックリ！

大阪らしく、「銭をもらっている以上受講料以上の満足感とお土産を持って帰って頂く」という感覚は、公費や共同募金、寄付金等、安定資金を活用している私たち社協マンの大きな課題と感じた。

BUT、低賃金で労働を提供している「大阪ボラ協」と「応援センター」の職員の皆さんに、福岡県地域福祉活動職員連絡会より、今後良い労働賃金体制が確立できるようエールを送ります。詳しい実践内容は「真さん」が…。

関西コミ協と福岡県地域福祉職員連絡会との関わり

昨年末の県地職連（福岡県地域福祉活動職員連絡会）の研修会に「関西コミ」から松永さんと高橋さんのお二人に、関西での取り組みについて、ご報告いただき、社協職員としての資質向上と、我々社協職員（地域担当だけでなく）が住民主体に事業展開が出来るか、また自己点検は…を突きつけられた。（6頁～8頁詳細掲載）

「関西コミ」の実践を、共有する事と、今後の福岡県社協の組織内組織である「福岡県地域福祉活動職員連絡会」

の活動指針を模索すべく「第四回全国社協職員をつどい」に今年は私たち三名が参加した。

若さバリバリのつどいスタッフ

「第四回全国社協職員をつどい」が始まり、出てくるスタッフの若さピチピチ…、何か違う。

北は北海道、南は九州熊本県の全国から二十三道府県、約二百名が参集し、お決まりの堅苦しい開会行事が始まると思いきや、お偉いさんの挨拶もなく、円卓方式のグループ形態の開会、進行役の大阪泉佐野市社協の中谷敦子さんと京都府社協の渡辺一真さんの軽快な関西弁での「ボケと突っ込み」によるオープニング、私たちは「吉本新喜劇」に来たのか、「テレビのバラエティー番組の公開収録会場」に来たのか？もしかして「全国社協職員をつどい」

に来たのか？？混同した。軽快なおしゃべりの中、私たちが参加しているこのグループは、参加申し込みの段階で「何らかの関係性」で、グループピングしているとの事で、「その関係性」は何か…？

グループ参加者で協議を行い、秘められた問題把握の調査とその傾向、解決のための回答は…の実践をさせられるはめに…。

いざ、本番の分科会に突入

分科会の設定は9分科会、

① どう描く!?5年後の肖像画「今」、

心の透き間を照らしたい
若さは夢現の可能性「(いまだ心は)二〇代の集い」

② 極めれば社協流
社協の直接サービス

③ 私たち近所福祉に命かけてます!
小地域ネットワークは社協を救えるのか

④ 社協のあり方を「根っこ」から考える

⑤ 「社協って何しているの?」じゃアカン!

⑥ 元気がほしい!みがき合える仲間

⑦ 変わらなきゃ!「社協・解体新書」
あなたも前野良沢、杉田玄白、それとも:

⑧ 法人運営・社協づくり

⑨ 社協マンの情報料理教室
タケコプターからどこでもドアへ

⑩ 公的介護保険・いま社協職員が問

われているもの
以上の盛りだくさんでユニークな分科会なので、あれもこれも覗いてみたい、聞いてみたい欲求にかられたが、体は一つ、「分身の術」は使えなかった。

分科会報告つまみ食い

筑後市の長野君から、第六分科会の

育ちあいの職場づくりのために

報告:それぞれの職場で、福祉が語り

合える環境にあるのか?また、「ヤリガイ」を感じる事ができる職場であるか?そんなことを中心に意見を

出し合いました。予定されていた「KJ法」での討論は中止になりましたが、いろんな思いを熱く語れて、本当に満足できる分科会でした。
「悩みを抱えているのは、オレだけじゃないんだ。カベにぶつかっているのも、オレだけじゃないんだ。」というふうに、元気を出すことができたと同時に、関西の「わかものパワー」にも、大きな刺激を受けました。

築城町の真さんから、第八分科会のタケコプターからどこでもドアへ報告:三つのグループ(六〜七人)に分かれ住民はどんな情報を欲しがっているのか、(必要としているのか)について各自より意見や問題提起、その後、

- ・ 社協情報調査
- ・ プレゼンテーション
- ・ インターネット
- ・ ページレイアウト作成
- ・ ページメーカー

という制作希望メディアを選択させられ時間の関係上ほんのさわりの部分でしか触れられなかった。

「情報」この言葉を聞いて、今はやりの「インターネット」や「ホームページ」の言葉がやはり出てきてパソコン

ンによる情報収集・発信が二一世紀の主役になるのは間違いないと思う。

しかし、社協で飯を食っている「私」たちにとってどこで(住民の住んでいるその地域で)だれに對しての情報なのかをもう一度問い直してみなければならぬのではないかな、と感じた。

パソコンも数ある情報収集・発信の一つであるということがわかった。

ただ、この分科会の課題設定、企画力、資料作りに尽力されたスタッフの熱意には、頭が下がる。

そろそろ、本場名物食い道楽(おはなしの部)へ

私は、第五分科会の住民から見た社協を考える

この分科会の参加者は一六名、さらに四つのグループに分かれ事例報告の後それぞれ、設定された討議の柱に添って議論するスタイルを、司会者より提起された。

事例報告では、社協と親しくお付き合いのある、「校区福祉委員会(校区社協)の委員長」と社協自体の存在をほとんど知らない「精神障害者の方々とお弁当屋さんを運営してあるスタッフ」そして社協と業務的なお付き合いのある「保健所の保健婦さん」よりそれぞれの立場から見た社協像を伺った。

住民から社協がどう見えるかというよりも、社協マンが住民とどう関わっているのが問われており、社協で飯を食っている我々の姿勢が問題と感じ

た。

特に私の心を揺らしたのは、福祉委員の吉田さんの提起で、昭和五〇年に自治会が、五三年には校区福祉委員会が結成され、校区の福祉活動を積み重ねて来ているのに、最近校区内で行った「保健福祉関係の住民認識調査」(正式な名称では有りません:私がこのレポートのために付けました)では、保健所八〇・六%、福祉事務所四一・六%、民協三二・五%そして栄えある社協は、なんと二〇・七%の知名度しか無いとのことであった。

吉田さんは民生委員でもあり、社協との関係の深い方であるが、今まで出会ってきた社協マンを通じて感じたことは、社協マンは「事務屋でなく人として接して欲しい」、「ドクターのように相談者に対し診察を行い、より良い処方箋を出して欲しい」、「地域で活動している私たちとお互いに人間的に成長し合う関係でありたい(多忙なのはよく解っているが...)」、社協マンが一緒にしていると企画の運営や、問題解決も安心して対応できる」と。。

もう一度初心に帰って明日からの仕事を始めるぞと元氣の出た分科会であった。

感じたことアレコレ

①、中心スタッフが「若い、若い!」:この規模の集いを福岡で開催したら、社協歴二〇年クラスの大御所を実行委員会のメインスタッフにして

行うと思うが、ここ大阪の実行委員会は、社協歴二〇五年の二〇代の構成となっており、しかも職種も色々：福岡の若手よ！大阪に習い我らおじさんを引き回しておくれ。

②、名刺交換をしながら、ハタと感じたのは、「福祉活動専門員」とか「地域福祉活動コーディネーター」みたいな名称が見あたらない。なぜかと聞いてみると、それは国庫補助金事業名でしよう…。

確かにそうだ、我々に重要なのは、給与に対応する給料表を渡すためには職務分類が必要である。もう一度我が社協の職務規程をはじめ規約を確認してみよう。意外な落とし穴があるかも。とにかく、様々なことを考えさせられたこの「つどい」…次回は是非、若手の君たちが参加してみたら…。



大阪見聞録

へおまけ…

築城町社協 佐々木真司

第4回全国社協職員をつどいが大阪で開かれるということ、せっかく大阪まで足を運ぶならば、手ぶらで帰るのはもったいない、と、県内から参加した2人と相談して社協職員をつどいが開催される当日、ほんの2時間程度だが「大阪ボランティア協会」と「おおさか行動する障害者応援センター」を訪れた。

「応援センター」代表の牧口さんに、万一、もう一度お会いできるかなと淡い期待を抱いていたが、やはり…おられなかった。

事務局は、専従職員3名（そのうち障害をもった方は1名、パート4名（同3名）の計7名。

当日は、職員の中村さんに対応していただいた。18年前「だれでも乗れる地下鉄に」ということでエレベーターの設置運動がやがて「応援センター」へと発展していったそう。

「応援センター」は、ボランティア活動の性格と、障害者運動の性格をもちあわせ活動と運動を展開している。

「街に出よう」と、外に出ることによって刺激を求めたり、社会には様々な問題があることを行政や住民に知ってもらおうと今後も外出にもっと力をいれていきたいと語られた。

悩みは、「ひとを集めること」と「金を集めること」だそうだが、どこかの団体と同じような…。

「応援センター」以外にも、障害者を支援する団体（有料）が五つあり、ボランティアで支えるには、限界にきていることと、有料化の波に押され、活動の境が見えにくくなってきているなど様々な課題を抱えて大変苦慮しているといわれた。

中村さんは、学校の講師をしながらボランティアとして「応援センター」に関わっていたが、その現実を目の当たりにして講師を辞め、専従職員として働いていると…そんな中村さんにエールを送りたい。

予定の時間をオーバーして、寸時の時間も惜しむように私たちは、「大阪ボランティア協会」へ伺った。しかし移動に時間がかからなかった。なんと「大阪V協会」は、「応援センター」の隣のフロアに事務所があった。

コーディネーターの福満さんが笑顔で歓待してくれた。

「大阪V協会」のことは、事前に資料をいただいて予習をしていたつもりだったが、資料を見るのと聞くとでは、大違い。その活動内容、バラエティに富んだ企画、研修、講座の豊富さに圧

倒され、私たちは絶句した。

無料か僅かな受講料で各種講座を行っている社協からすると受講料を負担している以上、受講料以上の「もの」は、絶対に満足して帰っていたかどうかには、絶対に満足して帰っていたかどうかで仕事に取り組んでいると、自信をもつて語られた。

30年という長い年月に培われた活動と実践。歴史が刻みこまれた「社会福祉法人大阪V協会」の凄さを肌で感じた。

もつとたくさんいろんな話を聞きたかったが、私たちに残された時間はなく、後ろ髪を引かれる思いで、「大阪ボランティア協会」と「おおさか行動する障害者応援センター」を後にした。今からいよいよ本番（社協職員をつどい）が始まるのに気持ちは、たっぷり一日研修をしたような感じで私たちはタクシーに乗り込んだ。

最後にご多忙中、時間をさいていただきいろいろと教えて下さった「応援センター」の中村さんと「大阪V協会」の福満さんに感謝したい。

「ありがとう」

いま、地域は

県内各ブロックでの活動をのぞき見するこのコーナー。
 今回は福岡地区地域福祉活動職員連絡会の研修会の模様をレポートします。
 「都城市社協の小地域活動に学ぶ」

玄海町社協 牧 雅仁

福岡地区地域福祉活動職員連絡会は、筑紫・糸島・粕屋・宗像地区の二〇社協、会員数四十二名で構成されています。県連絡会の中のイメージとしては比較的小規模なブロックですが、団結力は他のブロックに負けないものを持っていますし、地域では持ち前の個性を生かしながら日々仕事に取り組んでいます。また、最近では福岡地区連絡会の枠を離れて、若手職員同志の勉強会や飲み会、近隣地区対抗ソフトボール大会など自主的な活動も行われております。

小地域福祉活動に学ぶ

さて、福岡地区では毎年テーマを決めて自主研修会を行っています。平成七年度から八年度にかけて「小地域福祉活動に学ぶ」をテーマに県内外三社協で勉強させていただきました。今回は、南国宮崎の都城市社協にお邪魔させていただき、おいしいお茶と焼酎、そして霧島山の豊かな自然にも触れた二日間でした。

都城市は、宮崎県の南西部、都城盆地のほぼ中央に位置し、鹿児島県に隣接した人口十三万四千人を擁する街で

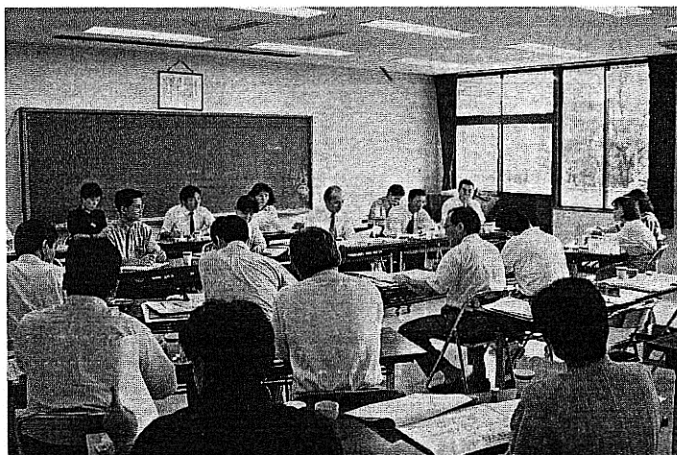
す。

都城市社協は、総合社会福祉センターに事務局があり、研修はその二階会議室を使わせていただきました。当初二、三人の職員の方が担当されると思っておりましたが、難段に並ぶがごとく事務局長さんをはじめ、次長、地域福祉活動コーディネーター、専門員、ヘルパー……。そして、なんと宮崎県社協の地域福祉課長を含め総勢十一名の方々が正面に揃われ、代表して挨拶しなければならぬ私の体は一瞬硬直しましたが、都城市社協の研修に対する意気込みを感じました。

研修は、都城市社協の専門員の進行で各担当ごとの事業説明がありました。内容は後で記述させていただきますが、とにかく皆さんの早口には驚かされ、メモを取る手が疲れたことを覚えています。午後一時三十分から始まった研修も三時間半という時間も忘れさせるほど熱心なものでした。なお、研修内容を、次の三つにまとめさせていただきます。

一、小地域ネットワーク活動

都城市のネットワーク活動の特徴



は、その地域の特性を重視して展開されていることです。現在、十一中学校区、百六十七自治公民館で「住民福祉講座」「見守り活動」「ミニデイサービス事業」という三本柱を社協から提示し、地域での取り組みがなされています。「住民福祉講座」は、自治公民館を拠点に展開され、介護教室や福祉ビデオの上映会、福祉サービスについての説明などが行われ、座談会により、隠れたニーズの掘り起こしに努めています。その中から高齢者などの要援護者に対する「見守り活動」につながっています。この活動は、近隣者で見守りチームを組織し、安否確認は

勿論、家事や買物の手伝い、民生委員や家族への連絡などを行っています。

「ミニデイサービス事業」は、全社協が勧めている「いきいきサロン事業」と同じようなもので、地域の高齢者が歩いて行ける公民館等で茶話会や健康講座を行うことにより、楽しい仲間づくりを通して精神的な張り合い、生活意欲の向上を目的として各公民館ごとに色々な工夫がなされています。

また、このネットワーク活動の啓発として年七回の情報誌発行と活動のリーフレット作成、ビデオ「こんにちは、お元気じゃひか？」の製作なども行っており、地域での座談会に役立っているようです。活動の問題点として、公民館活動の連携もありますが、現在一六七自治公民館でのネットワークの徹底が困難であり、行政を含めて定期的な協議がなされています。しかし、行政の理解が得られず補助金等を受けていないのが現状です。また、障害者へのネットワーク活動についても現在検討中というところです。

二、総合相談事業

平成五年度に「ふれあいのまちづくり事業」を受け、最も力を入れた事業です。常設相談は月曜から金曜まで、専門相談は月一回、地区に向いての移動相談なども

行われています。相談件数は、一か月約一〇件で、一番多い相談は離婚相談です。

また、「高齢者に力を入れ過ぎじゃないか。子育て、不登校の問題などもたくさんあるのに。」との声に対し、家庭児童相談事業も開設し、現在は精神障害相談も受けるようになり、子どもから高齢者まであらゆる相談に応じるための総合相談事業を展開しています。

三、都城市福祉施設等連絡会

平成五年度より各社会福祉施設と福祉事務所、訪問看護ステーションなど福祉専門機関との協働事業を行うために連絡会が組織されています。この連絡会では、他の福祉関係機関相互理解と総合的な知識・情報を得ることによって、都城市の地域福祉を推進していく原動力になっていくようです。

以上、研修内容を要約したものです。研修会終了後、宿泊先厚生年金センターで都城市社協と県社協から六人が懇談会に参加され、研修中では聞けない、話せない話に花がさき、焼酎を酌み交わす手は、夜が更けても休むことはありませんでした。

終了後、いつものように福岡プロックの数名が、「せっかくやけん都城のラーメンが食べたかー!」との声を快く受けていただき、都城の方々と夜な夜な街へ繰り出した次第です。車に揺られて着くには着いたのですが、何とそ

こは「とんこつ味の博多ラーメン屋」……。ちよつと複雑な心境でした。

この研修会をとおして感じたことは、職員の方々は勤めて四、五年の若いスタツプが多かったのですが、自分たちも学ぶところがあれば吸収しようとする意気込みと積極的な姿勢が感じられ、とても元氣な社協マンのみなさんに会うことができ、私など、原点に返ることを再確認しました。

また、昨年数名の方が退職されたとのこと。行政からの人件費補助率が八〇%と、やはり身分保障を確立しなければ人材確保、育成は困難であることを実感することとなりました。

ちなみに……

翌日の研修は、鹿児島県福山町で、「黒酢のふるさと福山をたずねて」と題し、黒酢の製造について勉強(?)しました。酢工場なんか行きたくないと言っていた専門員も、帰りには数本土産を下げ、都城市社協のエキスと黒酢のビンの重さで頭と体に刺激を受けながら、南国宮崎、鹿児島をあとにしました。

なお、ここを見学地を選んだのは、G社協の強い要望で強行されたということを最後に付け加えておきます。



関西の自主研修会に学ぶ

私たち社協職員は、これからどう「社協」活動を展開していったらよいのでしょうか。常に考えていかなければなりません。その際、当然学習活動が重要になってきます。十二月十二日に私たち地職連の研修会に、関西社協コミュニケーションワーカール協会大阪研究部会の松永さんにきていただいた。関西の自主研修会の活動方法等について課題提起をいただきました。



関西社協職員一協会
コミュニケーションワーカール協会
大阪研究部会
運営委員 松永喜雄氏

大阪府下における職員研修と職員連協の歴史

大阪府下の四三市町村で職員連絡協議会(以下、職員連協)を組織しており、その一つの事業として自主研修会が行われるようになりました。この職員連協は、一九六七年に事務局長も含めた組織として「専任職員親睦会」という名称で発足し、その後一九七四年に事務局長を会員の対象から除き「市町村社協職員連絡会」という名称等の変更を行い、今に至っています。また、この他にも会長を対象とした「会長会」、事務局長を対象とした「事務局長会」という組織があります。

一九八〇年から職員連協が主催で貸付けの部門だけでしたが、職員の「業務研究会」が発足し、勉強会が始まりました。その頃は業務時間中に大阪府

社協に向いていき、勉強会を行っていました。一九八二年には、ボランティア・地域関係業務・総務等それぞれの「業務研究会」が始まりました。毎月一回定例で行い、運営も職員自身が行っていました。

◎「自主研究会」発足の経緯

「業務研究会」発足当初、職員自身が様々な知識・情報を得たいという志で参加していました。しかし、次のようなことが問題となってきました。四つの研究会で行われていた勉強会の内容を、年間報告書にまとめて作成していたのですが、その中で事例を交えた報告書が市町村名入りで出されたのです。このことについて一部の事務局長からクレームが出て、それ以来、報告書作成にあたり、内容の確認が行われるようになりました。もう一つは、業務研究会の参加姿勢にルーズな職員が出てきたのです。そういったことから「業務研究会」の存在を問われることとなりました。しかし、この会が解散した本当の理由は、研究会の勉強内容がステップアップできない状況にあったからだと思います。当初から研究会に関わっていた参加者は今までとは違

った、一ランク上のテーマでの勉強を実施したかったのですが、新任職員のためには、基礎的な学習が必要ということもあって、その差異がかなりあり、埋めることが難しかったのだと思います。

職員連協の反省を踏まえ、業務・経験年数等関係なく、一人の社協職員として参加できるように、また何の軌轢も生じないよう有志で今の研究部会が発足しました。

◎取り組んできたテーマ

この研究部会発足の当初は、地域福祉時事研究会という名前で、一九九六年の八月現在で例会回数百回を迎えました。最近行った例会では、「ふれあいのまちづくり事業」が変化してきているというところで、その事業を実施している市町村社協や大阪府からの状況等を聴き勉強会を行いました。「社協のあり方研究会」という組織が全社協の中ででき、大阪府下の社協からもその会に所属していたこともあって、「社協のあり方についての中間報告」をもとに様々な分野職種の各参加者から社協について勉強会を行ってきました。内容は「社協の生き残り論」「本来の社協の姿」「有償サービス」「社協の置かれている現在の状況」などでした。そういういったそれぞれの思いをまとめ全社協の「社協のあり方研究会」に伝えました。しかしその後、最終報告は出されませんでした。

一九九〇年ごろには、デンマーク型の在宅福祉が格段と注目された時期ということもあって、デンマークをとりあげました。その時は、デンマークに視察に行かれた方を招いての講演会という形で勉強会を実施しました。

◎関西社協コミュニティワーカー協会発足の経緯

社協の新基本要綱が論議されているときには、当然自主研究会でも論議を重ねました。特に素案の段階では、「住民主体」という言葉が含まれていなかったということがありましたので。会員がそれぞれ資料を読んで、内容を把握してきて、疑問点等を持ち寄って論議を行いました。東京都の狛江市の社協職員の方や東京都社協の森本氏（現熊本学園大学助教授）に来てもらって講演を聴いて一緒に勉強を行いました。平成四年には「第一回基本要綱を考える社協職員の集い」を開催しました。その際、自主研究会と兵庫県にあったコミュニティワーク研究会と中心になって企画・運営し、基本要綱について全国から百人以上集まった参加者で討議を行いました。その結果を要望書としてまとめ、全社協に提出したのですが、結局この「第一回基本要綱を考える社協職員の集い」が契機となって、今の「全国社協職員のつどい」につながって来ました。同じくこれを機に関西社協コミュニティワーカー協会が発足しました。

本当は、せっかくここまで盛り上がったので、「自主研究会で新基本要綱を作ろうではないか」という動きがあったのですが、結局自分たちなりの基本要綱を作ることができませんでした。これは今でも残念に思っています。

△関西社協職員コミュニティワーカー協会大阪研究部会の今

◎研究会の現在の活動状況

現在三九名の会員がいます。その会員に対しては例会に参加しても、しなくても必ず会員全員に資料が届くようになっていきます。どうしても例会に参加する人が特定されてきますので、毎月一回（第一土曜日）のその例会でどのような内容でどういったことが話されているのかといったことをまとめてニュースとして、発足当初から発行しています。様々な事情で、参加が難しい会員のために研究部会とつながりを保つ一つになればと思っています。資料だけよりも、会員がどのような意見を発言したかなど分かると、自分も仲間という意識がもてるということもあって、ニュースを発行しています。また、そうすることによって結束力も高まるのではと思っています。

が少なかったので、午前中仕事が終わってからの午後二時から五時まで行っていました。そのうち、土曜日がほとんど休みになったのですが、色々と雑務等があるということで、今の時間帯になりました。

◎運営委員会にて運営

この組織を運営する運営委員会は現在九名いて、大阪府社協から二名、他は市町村社協からとなつています。発足当初から、都道府県社協が指揮をとってするよりもということでも市町村社協職員が運営委員長をしています。第三月曜日午後七時から大阪府社協で運営委員会を実施し、例会のテーマなど決めていきます。以前は一年間通して、基本的に同じテーマで、例会をしていたのですが、最近では社会情勢がめまぐるしく変化するので、そういったことは難しくなってきました。

一九九六年度は、社協の基本となる「住民の生活実態や生活課題」を正確に把握することにつながるような研究活動を活動方針の柱の一つとしています。特に「小地域ネットワーク活動」について社協が目指すものを事例等を用いて、個別の課題解決に向けて社協がどう取り組んでいくかの検討も行いました。

例会の実施方法としては、レポートを出してもらって、そのことについての学習会と、公開学習会、交流合宿、学習発表会を行っています。レポート

は社会と社協を取り巻く問題や状況についての「時事レポート」、会員が取り組んでいる事業の状況や行き詰まっていることや研究していることなどについて「会員レポート」、色々な立場の人からの様々な意見の「外部レポート」となっています。公開学習会は就職して二〜三年までの職員を対象として新規会員の開拓もかねての学習会です。交流合宿は他府県の職員との交流を目的とした宿泊学習会です。これは一九九二年から毎年実施しているもので、最初の年は静岡県、愛知県、滋賀県の職員の方々と交流会を実施しました。その現地向向いていっての現地研修会でした。静岡、兵庫県は自主研究会が存在していたので、その方たちと協力して一泊二日の研修会を行ってきました。また、自主研究会の組織がない所については、活発に動いてくれる方を中心に協力をしてもらってきました。せっかくなので、大阪と兵庫の研究会の会員が中心となって話し合った結果、一九九四年十二月に関西社協職員コミュニティワーカークラスに協力して、こうとうというところで、現在の組織に改組しました。

◎自主研究会を続ける意義

この自主研究会では、日常の担当業務以外のことを知ることができたり、経験年数に関係なく対等の立場で意見交換ができるなどが意義と言える

と思います。また、若い職員が育ってきている印象も持っています。人の話を聞いていくうちに、自分自身の意見をレポートにまとめ発言できるようになっています。ただし、会員が一部の市に偏ってしまっていること、中堅職員の参加が少ないという状況がありますので、そういった点は解決していきたいと思っています。

◎社協職員に求められる資質・技量と学習活動のありよう

「好きこそもの上手なれ」という気持ちが大変だと思っています。やはり好きでない、上手にはなれませんから。大変なこともあります。やはり私社協が「好き」という気持ちがあるからがんばれると思っています。これからの気持ちだけは大事にしていきたいです。それから社協職員は夢やロマンを現実にすると思います。「地域を耕す」という言葉のように、自分の思いめぐらす理想の地域に、長い時間を費やしてもそれに近づけることができます。それには、技量よりもそのことへの熱い思いが必要で、やはり体当たりしていかないと「地域」は変わりません。また、「見えてますか住民の姿」「聞こえてますか住民の声」このことを常に自分自身に問いかけること、またその姿勢を守って生きたいと思います。

〈連載〉 社協サポーターに拍手喝采

第7回目となったこの企画、これまで市町村社協の理事や評議員の立場で、社協活動を支えていただいている方々に思いの丈を語ってもらいました。

今回は、筑後市で、理事、民生委員、行政区長、校区福祉会会長と様々な形で関わりを持ってある太田黒一彌かずひろさんにご登場していただきます。太田黒さんは、昨年10月に結成された、ねたきり老人を抱える家族の会「コスモスの会」の会長でもあり、実際に介護をされた経験を持っておられます。

この7回目は、「コスモスの会」の会長の立場から熱い想いを語っていただきました。

「悩み」という字の「凶」の部分を取り除けるよ
うな、そんな家族の会
づくりを目指したい
……。



Q1 家族の会づくりへの思い立ちは
どんなことからでしたか。

A 私は、ねたきりの母親を抱えていました。その母は一昨年の五月に九十二歳で亡くなりましたが、母が亡くなり、介護の手がはぶけた今、思うことは「介護者を孤立させてはならない」ということです。

また、心の支えとなってくれる人は一体だれか、という点では「介護者同士」、「介護者と介護経験者」、「親身に支えて下さる保健婦さん」ではないかと思っています。

当時は、孤立無援の中で介護を続けておられる人たちが集まり、気がねなく話し合える会をつくり、介護にあか

りを持って頑張つて、互いに励まし合
い、助け合い、また細やかな願いを社
会に訴える会ができたらなという思い
で一杯でした。

この時期に市社協の中山氏から相談
がありました。

筑後市内の「ねたきり老人を抱える
家族の会」づくりに協力してもらえな
いでしようかと。

そして、平成六年の六月二十五日、
社会福祉協議会主催のもと、家族の会
づくりの準備会が行われたのです。そ
の内容としては「家族の会(仮称)」づ
くりについての経過と考え方の説明、
「家族の会」のあり方についての話し
合い、その他として、介護を通しての
自己紹介などが行われ、結論として「家
族の会」をつくろう、ということにな
ったわけです。結成に向けてはまず、
準備委員の選出を行い、八名の準備委
員が協力し合つて発会に向けて取り組
みを進めました。

その中では、関係機関である「福祉
事務所、保健婦、民生委員会、老人ホ
ーム、老人保健施設、在宅介護支援セ
ンター」などへの協力も取りつけまし
た。

そして、平成七年の十月八日に、ね
たきり老人を抱える家族の会「コスモ
ス」が発足したわけです。会員は二十
四人。

Q 2 では、コスモスの活動について
くわしくお聞かせ下さい。

A 高齢化社会にあつて、どの家庭に

も介護の問題が身近なものとなつてき
ています。もし、自分が「ねたきり」
や「一人暮らし」になったら、という
不安や、両親がそうなつたらという介
護者の立場からの不安は、だれもが感
じることではないかと思ひます。

そして、そんな時「だれが助けてく
れるだろうか」という課題が迫つてき
ます。そういうことから、先程も話し
ましたように、この会は悩みを抱えて
いる介護者あるいは介護経験者の人た
ちの集まりで、議論・理屈を闘わず会
ではなく、「そうですか」、「ああ、私も
そんな経験あります」という会であり、
介護で学んだことを語り合うと同時に、
よりよい介護はどうあるべきかを考え
る「勉強会」でもありたいと思つ
ています。

ですから、これまでは、各福祉機関
から講師を招き、福祉制度について知
識を深めたり、また視察研修などの取
り組みも行つています。

定例日は毎月第二日曜日で、社会福
祉協議会の事務局がある、総合福祉セ
ンターにて開催しています。

現在では、介護者の「リフレッシュ
の場」にもなつていふように感じます。

Q 3 ご自身も介護の経験があられる
このことですが……。

A ある日、こんなことがありました。
草取りをしていた母に、「ばあちゃん、
草取りやめんね。転んだらどげんすん
の、オレが取るけんよかばい」と私は
言いました。それから、ある朝のこと、

「お父ちゃま！お父ちゃま！助けて」
悲痛な叫びに眠りをさませ、とび起
きて母の部屋に行つたが部屋にいない
のです。「助けて、助けて、ご叫び声は
家の外、戸を開けて外を見れば、隣の
A君が堀の土手から母を助け上げてい
るところでした。

A君がいなかったらと思うとゾツと
します。

この出来事は、私たちが寝静まつて
いる間に、母が草取りに出かけた折の
ものです。

あのとき、「草取りやめんね」ではな
く、「一緒に取ろうね」とか、「草は取
ろうごたつ時は言わんね」——こう
言つていたらと悔やみました。

それ以来、母は内にこもり、私たち
は行動に注意をはらつていかざるを得
ない状況となつたのです。

ここから介護生活が始まり、一昨年
の五月に亡くなるまで四年余り介護を
続けてきました。亡くなつたというよ
りも、みんなが見守る中、「天寿をまっ
とうした」といえると思ひます。

一時は家庭崩壊の一步手前までいっ
たこともありましたが、それが救われ
たのは多くの方々の励ましとご教示、
真心のこもつた支えがあつたからだ
と思つています。

私は妻と共に、母が入院して亡くな
るまでの約百日間、ほとんど毎日病院
に通いました。
病院の待合室で同じ境遇の人たちと
の会話の中で、それぞれの境遇の立場

の中で懸命に光を求めて努力されてい
る姿に接する時、我が家だけでなく、
様々な計り知れない悩みがあることを
知つたのです。その中のいくつかをあ
げますと……

○家族や身内の協力が得られない。あ
あしろ、こうしろいちいち指導だけ
する(言うばかり)。

○悔やみ話しをする相手がいない。

○自由に出出ができない。

○支出が多く、経済的に苦しくなる。

○介護に疲れて、体の調子が変になる。

○勤めを休まざるを得ない、辞めざる
を得なくなつた。

○家庭が崩壊状態になつた(私たちも
全くそのとおりでした)。
など悩みはつきないといった状況でし
た。

その時、……といひますか、母を介
護する中で感じたことは、人は孤独に
は耐えられるが、孤立には耐えられな
いという、究極の人間心理への理解が
必要ではないかということを感じたも
のです。「とにかく心の支えがほしい」
この思いが、会づくりに対して私が積
極的に協力していきたいという気持ち
になつた一番の要因だつたような気が
します。

ですから、コスモスは、まずもつて
介護している人の心より所となるこ
とを主眼に置きたいと考えています。

Q 4 なるほど。では、会が結成され
て一年と少しが経過したわけです
が、会員さんたちからはどんな声

Q4 かががっていますか？
 A ちょうど一月に会員の人たちを対象にアンケートをとりました。

その中の「これまでの活動の中で、よかったことはどんなことですか」という質問に対しては、

- 介護者の友達ができたこと
- 会員同士の交流(定例会での話し)
- 専門家を招いての学習会
- 介護に関わるビデオ学習
- 施設見学
- 会報の発行
- 介護者リフレッシュふれあい旅行
- 食事を交えての交流会

○他の市町村の家族の会との交流会
 以上のようなことがあげられました。

この答えを見る限りでは、介護者の「心のより所」という点での役割は果たしつつあるのではないかという気がしています。

全体的な感想としても「気分的に自分自身明るくなった」ということで一致していますね。

Q5 最後に、ご自身も含め、会員の人たちは、今後どのようなコスモス会づくりを目指していられるのでしょうか？

A やはり、何度も申し上げてますように、どんなことでも言い合える会づくりというのが基本にあります。

それを踏まえた上で、同じく会員にアンケートをとり、今後の在り方や活動への期待について考えてみました。主なものをあげてみますと、

○人の目を気にしないで言いたいことを言い合える場を継続したい。
 ○この会を知らない人に、もっと知ってもらい、介護人の負担の軽減に役買えれば…。

○介護の研修に加え、それ以外の会員間の交流を大切にしていきたい。

○この会に参加したいが、参加できないという人もいるようだ。その理由などを聞き、それを解決するための取り組みを考えていきたい。

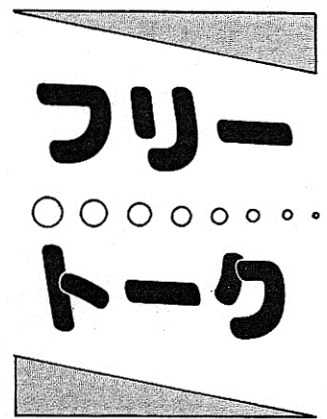
以上、すべて会員の人たちからの意見ですが、私も同じ考えです。

このコラムは「社協サポーター」を紹介するコーナーと聞いてましたが、このコスモス会は、社協をサポートするのではなく、社協と対等の立場で、物事を考えられるような自立した会にしていきたいと思っています。

そして、「悩み」という字の中の、「凶」の部分の少しでも取り除くことができると、会づくりに取り組んでいきたいと思っています。



道



赤池町社協 中野 雅浩

今も忘れない。あれはわたしが小学校四年生の二月十四日、初めて竹刀を握った日である。母は、野球少年だったわたしを無理やりに道場へ連れていき、よろしくお願いします。」との一言。わたしもその場の状況に流されたかのように「お願いします。」と小さな声でつぶやく。

その時は、これから汗と涙の厳しい剣道生活が始まることを知る由もなかった。

初めは楽しいはずの練習が、時がたつにつれて厳しい練習へと変わっていく。そしていつの間にかその道から逃れられなくなってしまう自分を感じた。

今までに、三度退部させられたが、その度に両親を連れて謝りに行ったものである。

しかし、今考えるとぞっとする。厳

しい練習のため、血尿まで出る地獄のような場所になぜ戻ろうとしたのだろうか。自分のプライドのため？それとも運命？さて、何故なのかは今も分からない。

しかし、その経験が後に大きな自信となったのは事実である。

剣道では、多くの術語や用語があり、その言葉がわたしにとって社会(特に社会福祉)で生きていく大きな糧になった。

- ・ 先生の先
- ・ 間合
- ・ 残心
- ・ 枕のおさえ
- ・ 遠山の目付
- ・ 止心
- ・ 不要の要

などなど数えきれない術語や用語がある。ここに書いた七つの術語の一つ一つに道としての意味があり、人生としての教訓が隠されていて、社会福祉の仕事においても根本的な支えとなった。最後の「不要の要」は、大学の恩師野田八段範士から聞かされた言葉で、一見不要に見えることも、実はたいへん重要な役割りをしていることがたくさんあるということである。

たとえば、数十メートルの断崖で道幅が数センチの場所を自転車で行けるだろうか。道幅が五メートルだったらどうだろう。本当は、轍(わだち)の幅だけが必要なわけであるが、回りの空白(まぐら)があれば前にはとうてい進めない。

何の役割もしていない道幅の空白が
実は大変重要な役割をしている。
このことは、社会生活や社会福祉を
進めるうえにも当てはまる。

私たちは、生かされていること、そ
して世の中に仕事をさせてもらって
いること（需要のない仕事は成り立た
ない。）を肝に銘じて社会福祉の仕事に携
わる必要があるのではないだろうか。
小学校四年生の二月十四日初めて竹刀
を握った日。それは、母から私への甘
くて辛い人生最高のバレンタインチョコ
コレートだったのかもしれない。



「サラブレッドと私」

前原市社協 水崎 浩幸

久しぶりのフリートークなので、何
を書こうかと迷っていたところ、仕事
のことではあまり面白くないので、
現在私が「ハマ」っている趣味とい
いますか、日常生活の一部になってしま
った「競馬」について少し書こうと思
います。

我が福プロにも競艇、パチンコ、麻
雀など様々なギャンブルにお詳しい諸
先輩方がいらつしやり、私もその影響
というか煽りを「モロ」に受けたのか

受けなかったのか、とにかくこの道に
足を踏み入れてしまいました。（決して
福プロの先輩方に原因があると言って
いるんじゃないやしません）本題に入りま
すが、競馬をはじめたころは、ただ新
聞を買って「この馬で間違いないし！」
と書かれた馬券を買っていましたが一
向に当たりませんでした。何度も失敗
し失敗をかさねいろいろ研究していく
うちに競走馬にも人間と同じようにそ
の日の体調、調教のやり方、血統、ま
たその日騎乗する騎手の性格、得意な
乗り方などさまざまなものが一つにな
った時に初めて一着でゴールできるの
だそうです。このことが理解できた時
にはもう膨大なと言ってはオーバーで
すが、とにかくたくさん資料に囲ま
れて情報収集に明け暮れる日々を送っ
ています。

ここで少し競走馬「サラブレッド」
について紹介しますと、ダービー、ジ
ヤパンカップ、有馬記念などなどG1
レースと言われる最高峰のレースに出
走できる馬は五つの要素を全て兼ね備
えていると言われます。①血統②スピ
ード③スタミナ④底力、最後に一番大
切な勝負根性の五要素です。このうち
いずれの一つが欠けても一流とは呼ば
れないし勝つことができないのです。
私は意外なことに気が付いたのです
が、この五要素と私たち社協マンには
共通点があるのではないのでしょうか。
①の血統はまったく関係ありませんが、
②のスピード（住民のニーズに素速く

対処できる行動力)③④のスタミナ、
底力（住民の幸せのために数々の難問
に対してもあきらめず、粘り強く解決
の糸口を探しあてる力）、最後に⑤の勝
負根性（他の機関のどこにも負けない
ぞと思う社協マン魂）です。強引に結
びつけた気もしますが、少しは仕事の
ことも書かないと「まなこ」の質が落
ちたと言われそうなので書いておきま
す。

話が横道にそれたのか、それが本題
なのか、なれない原稿書きなので支離
滅裂になってしまっています。競馬
の奥の深さ、面白さに取り付かれ完璧
にハマっている今日のごろです。

ちなみに現在の勝率はかんぱしくあ
りません。どなたか詳しい方がいら
っしゃったらご指導下さい。



ボランテニアフェスティバル 大阪に参加して

三橋町社協 津留 雅秀

ある日、C市社協のN氏より電話が
あり、いやな予感がした。というのも、
彼がまなこ編集委員であることを知っ
ていたからである。で、原稿締め切り
日までは時間があるので、「あ、よかよ。」
と言ってしまった。しかし、日がたつ

につれて、これだと思ふ材料がない。
そこで、苦しんだあげく、九月に大阪
の全国ボランテニアフェスティバルに
参加したときのこと原稿を書くこと
にした。

全国レベルの大会は初めての参加と
あって、緊張の中で現地大阪に向かっ
た。会場は、宿泊地から、JR環状線
に乗って十分程度のところであり、あ
くる朝、人込みの中の電車に乗って行
ったが、あの人なつくも荒つ
ぽい「ナニワ」の独特の雰囲気の中に、
なんとなく、違う空気を感じた。案の
定、私の乗っていた車両の人たちもか
なり駅で降りられた。全国から来られ
たボランテニアの参加者である。

私は、オープニングの会場へ足を運
んだが、さすが、大都市での開催とあ
って、開会式会場の大阪城ホールの大
きさには度肝をぬかれた。式典には、
八千人もの参加者の中で華やかに行わ
れた。開会式前の緊張感の漂う会場を
一遍に和ませてくれたのは、数十名の
地元保育園児の歓迎セレモニーであつ
た。関係者のあいさつ、来賓あいさつ
の後、盲学校卒業後八〇年に結成した
メンバーによるバンド演奏で会場はい
やがおうにも盛り上がった。

この後、各分科会場へ移動。あいにくの
天気で、屋外イベントは中止では
あつたが、四十四もの分科会や、講座
で熱心に議論、研究をされたようだ。
私の参加したシンポジウムでは、「新発
見ボランテニアロード」と題して、日

曜大工ボランティア活動、配食ボランティア活動、国際交流ボランティア活動、子どもを支えるボランティア活動の四つの活動が紹介された。日曜大工のボランティア活動は、大阪市の実践で、福祉、医療、住宅に関する専門家による小規模住宅改造のボランティア活動。配食ボランティア活動は、東京品川区の企業がもつ人的豊富な特性を生かした、昼休みの時間を利用した配食活動。地域に根差した国際交流ボランティア活動は、神奈川県綾瀬市の取り組みで、難民施設がある地域性の関係で、国際色を生かした子どもたちへの学習ボランティア活動。子どもを支えるボランティア活動は、東京世田谷区の取り組みで、深刻ないじめの問題を前に、命の大切さを訴えることを根底にもった、子どものサポートシステムづくりのためのボランティア活動であった。それぞれに、タイプの違う活動を紹介されたわけであるが、ディスカッションの中で、特に印象に残ったことは、「文明の力で便利になってしまったけれども、このままでは、人類は生存できないだろう。地域を外から見たら、空気の層が非常に薄いのがよく分かります。二千年より様々な人六人を六ヶ月間、宇宙船で住まわせる実験をします。よっぽど人間同志がうまくやっていないと持たないでしょう。だから、これからの科学者は、徳の高い人でないとだめですよ。」と宇宙センターの所長さんの話をされたことだ。

これを聞いてドキッとした。ホント、今の科学の進歩による弊害を科学者の立場でつかれたのだ。これからは、便利になればなる程、人間同志のつながりが大事になってくるということだ。人の力は、いつの世でも大きい。この大会の底に流れるテーマに通ずるものを感じた。
ヤッパ、所詮この世は人なんですな。

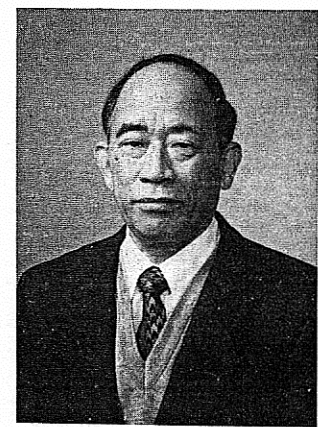


日々の中から雑感

北野町社協 野瀬 光治

私は、家事のこともあり工業高校を卒業しすぐに三重県鈴鹿市にあるH会社へ就職した。当時、鈴鹿市はあまり開けてなく田の真中に寮があったことを思い出す。バイク七五〇cc(通称ナナハン)に乗っていた頃又、サーキット観戦をしていた頃が頭に甦る。そのH会社を都合により退職し、現在の社協に入ったのが二十四歳の時であった。社協とは、どういう仕事をしなくてはいけないかまったくわからないまま入社した。時がすぎて今、感じていることは、社協には、いろいろな人がおとずれる。福祉の為に役立てて下さいと

香典返しや寄附やバザー等の一般寄附金を持つてこられる方とか。また、うつむきかげんにいろいろな事情があつてお金に困つてます?いくらか貸して下さる制度はありますか?あるなら貸して下さいませんか。又、その隣りでは、ボランティアが悩みやこれからの活動などを話している。その隣りでは立寄つた住民が歓談している。まだ、当社協は行政の一部を間借りしている状態で、狭い事務所は我々職員がちょっと席をはずしている座る場所もない状況にある。しかし、このような多くの住民が立ち寄つて頂けるといふことは、社協としてお客があつてこそはじめて存在できることを再認識する必要があるのではないだろうか。住民が社協を作り、社協を使うものだということをまず職員が再認識して、弱い立場にある方、悩みのある人が、気軽に利用できる社協を作りあげることが急務と思つている。でも仕事が忙しい時などそのようなことを忘れ感情が入り実現できないことが多分にある。又、これからの福祉はむずかしくなる。介護保険の導入だ。やがて導入されるようとしている公的介護保険の実現でのサービスのむずかしさ。法人や医療法人、シルバーサービス等との本格的な競争時代に入ることになりそうだ。これから我々職員一丸となり福祉サービス充実の為、頑張っていきたい。



添田町社会福祉協議会 原康彦
経験年数 三カ月
特技趣味 読書
メッセージ

明日花咲け

新人紹介

平成八年十月より添田町社会福祉協議会専門員として社協に勤務、まだ日も浅く現在勉強させていただいております。
昨年七月、城をイメージして造られたふれあいの館「そえだジョイ」が開館しました。この施設は高齢者福祉や障害者福祉サービスの拠点として町が建設したものです。

その施設の運営を添田町社会福祉協議会が受託、子供からお年寄まで利用できる福祉施設として、大変好評をいただいております。

平成八年度社協事業計画に基づき高齢者の在宅福祉サービス事業などの推進に努力していますが、経験のない仕事が多く各団体の関係者に迷惑をおかけしてしまいます。一日も早く福祉活動ができるよう勉強したいと思っております。よろしくご指導をお願い致します。